



千一夜物語Ⅲ

佐藤正彰 訳

世界古典文学全集

33

筑摩書房

千一夜物語 Ⅲ

世界古典文学全集 第33卷

昭和41年1月30日 初版第一刷発行

昭和43年6月30日 初版第三刷発行

訳者 佐藤正彰

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町 2-8
掘替東京 4123 電話(291)7651

目次

千一夜物語

(第四百六十五夜から第八百七夜まで)

佐藤正彰訳
5

千
一
夜
物
語
Ⅲ

漁師ジウデルの物語または魔法の袋

お幸多き王様、わたくしの聞き及びましたところで、昔オマールという名前の商人がおりまして、子孫と致しましては三人の子供がございました。ひとりはサーレムと呼ばれ、二番目はサリームと呼ばれ、一番末はジウデルと呼ばれました。彼は子供たちがいずれも成人の年齢に達するまで育て上げましたが、しかし末のジウデルをば兄たちよりもずっとずっと可愛がりましたので、兄たちはこの依怙蟲眞に気がついて妬みを覚え、ジウデルを嫌いぬきました。そこで、商人オマールは、もう既に齢を重ねた老人でしたが、自分のほうでも、このふたりの息子兄弟に対する憎しみに気がつくくと、自分が死んだら、ジウデルはさぞ兄たちにいじめられることだろうと、たいへん心配しました。それゆえ、彼は家族の人々と、数名の学識者と、また法官の命令で財産相続のことに従事しているいろいろの人たちを集めて、まず申しました、「私の全財産と私の店の反物全部を持って来てくれ。」そしてその全部が持つてこられると、そのとき言いました、「おお皆の衆、この財産と反物を、法に従って、四つに分けて下され。」一同はこれを四つに分けました。すると老人は子供たちめいめいに、それぞれそのひとつを与え、四番目の分を自分の手許に残して、言いました、「これらすべては私の財産であるが、子供たちが今後私に何も求めることなく、またお互い同士で何も求め合うことがないように、そしてわが死後、子供たちが不和にならずに済むようにと思って、私は生きているうちに、これら子供たちに頒けました。この私の取った四番目の分は、子供たちの母親たる私の家内が、困ることのないように、家内のあるところに行くべきものです。」

ところで、その後間もなく、老人は死にました。然るに息子のサリームとサリームは、前に行なわれた分配に少しも満足しようとせず、ジウ

デルに対して、彼のものになった分の一部をよこせと要求して、言いました、「家の親父の身代はお前の手にはいつてしまったのだ。」

——ここまで話したとき、シャハラザードは朝の光が射してくるのを見て、つつましく、口をつぐんだ。

けれども第四百六十六夜になると

彼女は言った。

そこでジウデルは、兄たちに対して裁判官の力を借り、分配に立会った回教徒の証人たちに出廷してもらわざるを得ませんでした。証人たちはみな自分の知るところを証言しましたので、それゆえ裁判官は、ふたりの兄がジウデルの分を要求することを許しませんでした。けれどもその訴訟費用は、ジウデルと兄たちに、それぞれ持っている分の一部を失わせました。ところが、それでもなお兄たちは、しばらくたつと、またジウデルに対して悪だくみをめぐらすことをやめなかつたので、ジウデルはまたもや、これを裁判官たちに訴えざるを得ませんでした。それでまたぞろ彼ら一同は、裁判費用として、財産を多分に失わせられました。ところが兄たちはそれでもなおやめず、そして三番目の裁判官の前に出て、次には四番目、五番目という風にして、とうとう彼らは裁判官たちに遺産全部を食われてしまい、三人とも貧乏になって、パン菓子と玉葱ひとつ求める一枚の銅貨もない有様となりました。

ふたりの兄弟サーレムとサリームはこういうていたらくになって、もうジウデルは自分たちと同様赤貧になってしまつて、何も要求できないとなると、今度は母親に対して悪だくみをめぐらし、散々母をいじめたあげく、首尾よくだまして、全部捲きあげてしまいました。気の毒な女は、泣きながら息子のジウデルに会いに来て、訴えました、「お前の兄さんたちは、私にこれこれのことをしたのだよ。そして私の遺産の分け

前を全部捲きあげてしまいました。」そして兄たちに呪いを浴びせかけはじめました。けれどもジッデルは母に言いました、「おおお母さん、兄さんたちに呪いを浴びせかけたなりすすつてはいけません。アッラーが兄さんたちめいめいを、それぞれの行ないに従って、きつと始末して下さるでしょうから。ところで、私にしても、私はもう法官ウァイデやほかの裁判官の前で、兄さんたちを相手にすることはできません。何しろ訴訟には費用がかかるし、私は裁判で、自分の全財産をなくしてしまつたのですからね。だからいつそ私たちはふたりとも、あきらめて黙っているほうがましです。それに、おおお母さん、あなたは私のところにいなさりさえすればいいことです。私の食べるパンは、お母さんに差し上げましょう。おお私のお母さん、あなたはただ、私のためにせいぜい祈つて下さい。そうすれば、アッラーは私がお母さんを養うために、必要なものを授けて下さいます。兄さんたちのほうは、至高の審判者から、自分たちの行ないの報いを受け取るままにまかせておいて、次の詩人の言葉で、お心を慰めなさいまし。」

無法者汝を庄せば、忍耐強くこれを耐えよ。しかして、復讐するにただ『時』をのみ頼むべし。

されど暴虐を避けよ。何となれば、山を庄する山は、それよりも更に逞ましき山によつてやがて打ち砕かれ、微塵となつて飛散すべければ。」

そしてジッデルは母親にいろいろ親切な言葉を言い、優しくし、なだめつつけて、こうしてうまく心を慰め、自分のところに来る決心をさせました。そこで彼は、自分たちふたりの糧を得るために、魚網を手に入れて、毎日、あるいはブーラクのナイル河に、あるいは方々の大きな池に、あるいはそのほかの水の満ちた場所に、漁をしに出かけはじめました。このようにして、ある時は銅貨十枚、ある時は二十枚、ある時は三十枚を稼いで、全部を母と自分のために遣いました。こうしてふたりは

十分に飲み食いしておりました。

さてふたりの兄のほうは、商売も、売りも、買いも、何もありません。貧窮と零落とあらゆる災厄に庄し潰されてゆきました。母から捲きあげたものも、じきに使い果たしてしまつて、もうこの上なくみじめな境遇に陥り、何ひとつない素裸かの憐れな乞食に成り下がりました。そこでやむを得ず母親に縋りにゆき、母親の前に三拝九拝して、身をさいなむ飢じさを訴えざるを得ませんでした。ところが、母親の心というもの、慈しみ深く憐れみ深いものでございます。それで母親はふたりの窮迫ぶりに哀れを催して、残り物の、なかにはもう微ホホだらけになつていゝものもあるパン菓子を与へ、昨日の食事の残りも出してやつて、ふたりに言いました、「早く食べて、弟が帰つてこないうちに行つておしまいよ。ここにお前たちがいるのを見れば、弟はきつと気を悪くして、私に対して心を冷たくするだろう。そうなると、お前たちのため私まで弟に工合が悪くなるからね。」そこでふたりはいそいで食べて立ち去りました。ところが、日々のうちのある日のこと、ふたりが母親のところにはいつても、母がいつものように、料理とパンを前に出して食べさせようとする、そこに突然ジッデルがはいって参りました。母親はたいそう面目なくまごついてしまい、弟が自分に腹を立てはしまいかと案じて、息子のほうに恐縮した眼差を向けながら、頭を床のほうに垂れました。ところがジッデルは、不愉快そうな様子を見せるところか、兄たちの顔に微笑みかけて、これに言いました、「これはよくいらつしやいました、兄さん方。おふたりの日が祝福されてありますように。いったいどういふことがあつて、ようやくこの祝福された日に、私たちに会いに来る決心をなさつたのですか。」そして彼は兄たちの首に飛びついて、真心こめて接吻しながら、言いました、「まったく、兄さんたちに絶えてお目にかからず、こうして私を淋しさに悩ませなすつたとは、兄さんたちはいけませんね。おふたりはもうあれぎり、私の様子とお母さんの様子を見に、ずっと私のところに見えませんでしたよ。」ふたりは答えました、「アッラーにかけて、おお弟よ、おれたちだつて、お前に会いたい気持ちにずいぶん悩ま

されたものだ。おれたちをここに来るのを控えさせたのは、ただ、おれたちとお前との間に起ったことを恥じる気持からだだけだ。だが今おれたちは無上に後悔しているよ。それに、こうしたすべては悪魔（称めらるるアツラー）によって、呪われぬことを）の仕業だったので、今はおれたちは、お前とお母さんの外に祝福を持たないよ。」するとジッデルはこの言葉に大いに感動して、ふたりに言いました、「私も、わが兄上おふたりの外に祝福を持ちません。」すると母親はジッデルのほうを向いて、言いました、「おおわが子よ、どうかアツラーはお前の顔を白くし、お前の繁栄を増して下さるように。それというので、私たち全部のなかで、お前が一番寛大です、おおわが子よ。」ジッデルは言いました、「兄さん方、よくいらつしやった、私の家にお住みなさい。アツラーは寛大にましまして、福業はこの家に満ちあふれております。」そして彼は兄たちとすつかり仲直りして、一緒に夕食をし、兄たちは彼の家でその夜を過ごしました。

翌日になると、みんなで一揃に朝の食事をとつてから、ジッデルは網を担いで、「開きたもう者」の寛仁を頼みながら出かけ、一方ふたりの兄もまた出かけ、昼まで留守をして、昼になると母親と食事をしに戻ってきました。ジッデルのほうは、夕方になってようやく、肉や野菜や、自分の一日の稼ぎで買ったものすべてを携えて、帰ってきました。こうして彼らはひと月の間、ジッデルが魚をとつてはそれを売り、その上りを母と兄たちのために費して、暮らしましたが、兄たちは食べては遊んでいるばかりでした。

——ここまで話したとき、シャハラザードは朝の光が射してくるのを見て、つつましく、口をつぐんだ。

けれども第四百六十七夜になると

彼女は言った。

ところが、日々のうちのある日のこと、ジッデルは河に網を打って、上げてみると、網は空でした。今一度打ちましたが、上げてみるとやはり空です。そこで心なで言いました、「この場所には魚がないいな。」そして場所を変えて、網を打ち、上げてみると、またもや空です。二度、三度と、それからそれへと、朝から晩まで場所を変えてみました。ただ一匹の河沙魚さえもとれません。そこで彼は叫びました、「お不思議なことだ。もう水のなかに魚がないのかしらん。それとも原因は別にあるのかな。」そして、折から日が暮れかかったので、彼は背中に網を担いで、心を痛め、悄然として、兄たちと母の憂い悲しみを一緒に運びながら、どうしたらみんなにこれから夕食を食べさせてやれるかわからずに、とぼとぼと帰ってきました。こうやって、いつも帰りみちに、夕方のパンを買うことになっているパン屋の店先にさしかかりました。見ると大勢のお客が、手に手に銭をもつて、パンを買おうと殺到していて、パン屋はひとりひとりにあまり注意も払わずに売っています。そこでジッデルはひとり離れてしょんぼりと立ち止まって、買う人たちを眺めながら、溜息を吐いておりました。するとパン屋は彼に言いました、「これはようこそいらつしやった、おおジッデルさん。パンが御入用ですか。」けれどもジッデルは黙っていました。パン屋は言いました、「もし今お持合せがないのなら、かまわないから御入用のものを持っていらつしやい。お払いは後で結構ですから。」するとジッデルは言いました、「銅貨十枚分だけパンを下さい。そして抵当に私の網を取っておいて下さい。」けれどもパン屋は答えました、「それはいけない、おお気の毒な方よ、あなたの網はあなたの稼ぎの門なのだから、もし私がそれを取ったら、あなたに生計の門を閉ざしてしまうというもの。さあ、ここにいつもあなたの持つてゆくだけのパンがある。それからこの銅貨十

(1) Nust, 即ち半ドラクムの銅貨である（バートン）。

(2) 「日々の糧の扉を開きたもう者」の意（バートン）。

枚は私からの志だ、きつと何かと御入用でしょう。そして明日、やあ、ジッデルさん、銅貨二十枚分の魚を持ってきて下され。」するとジッデルは答えました、「わが頭と眼の上に。」そしてパン屋に厚くお札を述べながら、そのパンと銅貨十枚をもらって、それで肉と野菜を買いにゆきながら、心中で思いました、「明日は、主は私に何とか借金を返す手段を授けて下さるだろう。主は私の心配を晴らして下さることだろう。」そして自宅に戻ると、母親はいつものように料理をしました。そしてジッデルは夕食を食べて、眠りました。

翌日になると、彼は網を取り上げて、出てゆくこととしました。けれど母親はこれに言いました、「お前は朝のパンを食べずに、出てゆくのかい。」彼は答えました、「お母さん、私の分はあなたが兄さんたちと一緒に食べて下さい。」そして河に行つて、一度、二度、三度と網を打ち、いくたびも場所を変え、それを午後の礼拝の時刻までつづけましたが、やはり何ひとつ取れません。そこで彼は網を収めて、この上なく悲しんで帰りかけましたが、家に戻るには他に道がないので、例のパン屋の店先を通らざるを得ませんでした。するとパン屋は彼の姿を見つけて、また新たに十個のパンと十枚の銅貨を数えて、彼に言いました、「さあ、これを持っていらつしやい。運命の定めたところが今日来なかったのなら、明日は来るでしょうよ。」そしてジッデルが言い訳をしようとしたと、パン屋は言いました、「さあさあ、おお気の毒な方よ、何も私に言い訳をなさる必要はない。もし何か漁があったのなら、あなたは私に払う代があったわけなのだから。明日もまた不漁だったら、恥ずかしがらずにここにいらつしやい。払いはいつだつてかまわないし、いくらでも貸してあげます。」

ところがちょうど翌日も、ジッデルは全然漁がなく、またはやパン屋のところに行かざるを得ませんでした。そして引き続き七日というもの同じ不運に見舞われ、八日目には彼は非常な心の悩みに陥つて、心中独りごとを言いました、「今日はひとつカールン湖に出かけてやってみよう。ひよつとすると、あそこにおれの天命があるかも知れない。」

そこで彼は、カイロの町から程遠からぬところにあるカールン湖に行つて、そこで網を打とうと構えていると、その時ひとりのマグリップ人が此驛馬に乗つて、自分のほうに来るのを見かけました。その男は並みはずれて美しい着物を着、頭巾付外套と頭布にすつかりくるまつていて、片方の眼しか出していませんでした。此驛馬も同様に金の天鵞絨と絹布で包まれ飾られていて、臀のところには、色のついた毛糸で作つた旅囊が置いてありました。

そのマグリップ人はジッデルのすぐそばまでくると、驛馬から降りて、言いました、「御身の上に平安あれ、おおジッデルよ、オマールの息子よ。」そこでジッデルは答えました、「して、御身の上にも平安あれ、おおわが御主人巡礼様。」マグリップ人は言いました、「おおジッデルよ、私はぜひお前の力を借りたいのだが。もし私の言うとおりにしてくれば、お前は非常な利益と莫大の富を取めることになる。そして私の友人となり、私の事務一切をとりしきるようになるであらう。」ジッデルは答へました、「おおわが御主人巡礼様、お心にあることをおつしやいませ、私はどのようなことでもお言葉に従ひましょう。」するとマグリップ人はその男と一緒に、コーランの開扉を誦えました。「そこでジッデルはその男と一緒に、絹紐を取り出して、彼に言いました、「おおオマールの息子ジッデルよ、この絹紐でもって、できるだけきつく私の両腕を縛ってもらいたい。その上で、私をこの湖に投げ込んで、しばらく待たせていなさい。そしてもし私の手が身体よりも先に水の上に出てきたら、いそいでお前の網を打つて、私を岸边に引き上げてくれ。だがもし私の足が水の外に出てきたら、それは私が死んだものと思いなさい。その節は、もう私のことは気にかけないでよい。この驛馬を旅囊をつけたまま曳いて行つて、商人の市場に行けば、そこにシャマヤアという名前のユダヤ人がいる。その男に驛馬を渡すと、百ディナールくれるから、お前はそれを受け取つてお前の道を立ち去るがよい。だがしかし、こうしたすべてについては、固く秘密を守ってもらいたい。」

——ここまで話したとき、シャハラザードは朝の光が射してくるのを見て、つつましく、口をつぐんだ。

けれども第四百六十八夜になると

彼女は言った。

そこでジュデルは答えました、「仰せ承わり、仰せに従います。」そしてそのマグリップ人の両腕を結ぎますと、「もつときつく、きつく」と言うのでした。いよいよすっかり縛り上げると、彼はその男を持ち上げて湖のなかに放り込みました。それから、しばらく待って、どうなることかと見ておりました。

ところが、しばらくたつと、突然マグリップ人の両足が同時に水中から出てきて、浮かび上がるのを見ました。

そこで、その男は死んだのだとわかりましたから、もう彼のことには気にかげずに、牝驃馬を曳いて、商人の市場に行きますと、果たしてくだんのユダヤ人が、自分の店の入口に、椅子に坐っておりまして、その驃馬を見ると叫びました、「もう疑いない。あの男は死んでしまつたわい。」次に付け加えて言いました、「貪欲の犠牲になつて、死んでしまつたわい。」そしてそれ以上一言も付け加えずに、ジュデルの手から驃馬を受け取り、くれぐれも秘密を守るように言いながら、彼に百ディナールの金貨を数えました。

そこでジュデルはユダヤ人から金子を受け取つて、いそぎパン屋に会いにゆき、いつものようにパンをもらつてから、一ディナールを差し出しながら、言いました、「これでお借りしている分を取つて下さい、おわが御主人よ。」するとパン屋は勘定をして、彼に言いました、「あと二分のパンをお預りしていることになりました。」ジュデルはパン屋を去つて、肉屋と八百屋のところへゆき、それぞれ一ディナールずつやっ

て、言いました、「私の入用な品を下さい。そして残りの金子は、そちらにお預けしておきます。」そして肉と野菜をもらつて、全部を家に持つて帰りますと、家では兄たちがひどくお腹をすかして、母親がふたりに、弟の帰るまで辛抱しなさいと言つてるところでした。そこで兄たちの前に食物を出すと、ふたりは悪鬼のようにそれに飛びついて、料理ができるまで、まずパン全部を貪り食いました。

その翌日、ジュデルは出かける前に、持つている金貨全部を母親に渡して、言いました、「これをお手許にしまつておいて、兄さん方が何ひとつ不自由しないように、兄さん方にすこしずつ差し上げて下さい。」そして漁の網を携えて、カールーン湖に戻りました。それからいよいよ仕事をはじめようとすると、その時また前のマグリップ人とよく似た第二のマグリップ人が、ずっと立派な服装をして、ずっと美々しく飾つた牝驃馬に乗つて、自分のほうに進んでくるのが見えました。その男は地に降りて言いました、「御身の上に平安あれ、おオオマルの息子ジュデルよ。」彼は答えました、「して、御身の上にも平安あれ、おおわが殿巡礼様。」その男は言いました、「お前は昨日、ちようどこんな驃馬に乗つたマグリップ人が、お前のところに来るのに会わなかつたかな。」けれどもジュデルは、昨日の男の死んだことを咎められては困ると思つて、これは、飽くまで知らないこととしておいたほうがよいと考え、そこで答えました、「いえ、誰にも会いませんでしたが。」第二のマグリップ人は微

(1) Karoun. カイロの南部地方にある溜池または小湖だが、ずっと前に埋められてしまつた(パートン)。

(2) Moghrabin. 単数は Maghrabi 複数は Magharibah で「西の人」の意で、ムーア人を言う。マグリップは「西」を意味し、アラビアの地理学者がアフリカ北部地方、トリポリタニア、チュニス、アルジェリア、モロッコの辺を指した。パートンによると、多くはマールイク派回教徒で魔法使と宝探して有名という。

(3) 「メッカ巡礼をした人」というのは回教徒間の敬称(マイン)。

笑して言いました、「おお憐れなジッデルよ、いったい起ったことで私の知らぬことなど何ひとつないのを、お前は知らないのか。お前が湖に投げ込んで、その騾馬をユダヤ人シャマヤーアに百ディナールで売ったあの男は、実は私の兄弟だったのだ。なぜ知らぬ顔をしようとするのか。」彼は答えました、「委細御承知とあらば、なぜ訊ねなされるのですか。」その男は言いました、「それというのは、おオジッデルよ、実は私もお前に兄弟同様の世話をぜひ頼みたいからだ。」そう言つて、立派な旅囊のなかから太い綱紐を取り出して、それをジッデルに渡しながら、言いました、「兄弟を縛つたと同じくらいきつく私を縛つて、私を水に投げ込んでくれ。もし私の足が先に出てくるのが見えたら、私は死んだのだ。その節はこの騾馬を曳いて行つて、例のユダヤ人に百ディナールで売らなさい。」ジッデルは答えました、「では、こちらにお進み下さい。」するとマグリップ人は進み出ましたので、ジッデルはその両腕を縛り、身体を持ち上げて、湖のなかに放り込むと、ぶくぶくと沈んでゆきました。

ところで、数分たつと、両足が水から出るのが見えたのでした。そこで、このマグリップ人が死んだとわかりました。彼は独りごとを言いました、「あの男は死んだわい。もう二度と戻つてくるなよ。災いのうちに歩いてしまえ。インシャラー、こいつは毎日マグリップ人がおれのところにやつてきて、水に放り込めば、百ディナール儲けさせてもらえるといいがなあ。」そして騾馬を曳いて立ち去り、ユダヤ人に会いにゆくと、ユダヤ人は彼の姿を見て叫びました、「二番目の男も死んだな。」ジッデルは答えました、「どうかあなた様のお首は生き永らえますように。」ユダヤ人は付け加えました、「大望を抱く輩の報いはこんなものだ。」そして騾馬を受け取つて、ジッデルに百ディナールくれましたので、ジッデルは母親の許に帰つて、その金子を渡しました。すると母親は訊ねました、「だが、おおわが子よ、こういう金貨全部は、いったいどこからお前の手にはいるのかい。」そこで彼は自分に起つたところを話すと、母はたいそう怖がつて、申しました、「もうカールン湖には行かないが

いいだろうよ。マグリップ人たちがお前に何をするか、私は怖くてならぬいよ。」彼は答えました、「けれども、おおお母さん、私はなにも当人の承諾なしで、水に放り込んであるわけではありません。それに溺らせてやる商売は日に百ディナールになるときは、こいつはやめられませんか。アッラーにかけて、こうなつては、私は毎日カールン湖に出かけて、マグリップ人の最後のひとりまで、私の手で溺らしてやり、もうマグリップ人の痕形もなくなるまでつづけたらと思ひますよ。」

そこで三日目もジッデルはカールン湖に戻ると、その途端に、やはり前のふたりと驚くほど似ているけれども、着物の立派さと、乗っている牝騾馬を飾る装いの美しさでは、遙かに前のふたりを凌ぐ第三のマグリップ人が、やつてくるのを見ました。そして後ろの旅囊のなかには、蓋のついたガラスの大きな広口罫が、ひとつずつ両側にはいつていました。その男はジッデルに近づいてきて、彼に言いました、「御身の上に平安あれ、おオオマールの息子ジッデルよ。」彼はこれに挨拶を返しながら考えたのでした、「みんながおれを知つていて、おれの名前まで知つているとは、いったいどうしたことなのだろう。」マグリップ人は彼に訊ねました……

——ここまで話したとき、シャハラザードは朝の光が射してくるのを見て、つつましく、口をつぐんだ。

彼女は言った。

けれども第四百六十九夜になると

……マグリップ人は彼に訊ねました、「お前はマグリップ人がここを通りかかったのを見たことがあるか。」彼は答えました、「ふたり見ました。」その男は訊ねました、「その人たちはどこへ行ったかね。」彼は言いました、「ふたりとも私が両腕を縛つて、この湖に投げ込んだら、溺れ死ん

でしまいましたよ。もしあなたも彼らの運命がお望みとあらば、御同様な運命にあわせて差し上げます。」この言葉に、そのマグリブ人は笑い出して、答えました、「おお気の毒な人よ、お前は、あらゆる生命にはあらかじめ定められた期限があるということを知らぬか。」そしてその男は驃馬から下りて、悠然と付け加えました、「おおジッデルよ、私もお前が彼らにしてやったことをしてもらいたいと思う。」そして旅籠から太い絹紐を取り出して、それを渡しました。するとジッデルはこれに言いました、「では両手をお出しなさい、後ろ手に縛ってあげますから。早くして下さいよ、私はたいへんいそいでいて、一刻もぐずぐずしてはられないから。それに私はこの道にかけては詳しいから、私の溺らす腕前を信用なすって大丈夫ですよ。」するとマグリブ人は両腕を委せました。ジッデルはそれを後ろ手に縛り上げ、次に身体を持ち上げて、湖のなかに投げ込みますと、沈んで行って姿を消すのが見えました。そして驃馬を連れて立ち去る前に、マグリブ人の両足が水から出るのを待っていました。この上なく驚いたことには、水を分けて出てきたのは、両手で、つづいて頭とマグリブ人の全身が出てきました。そして彼に叫びます、「おれはまるっきり泳げないのだ。いそいでお前の網でおれをつかまえてくれ、おお気の毒な人よ。」ジッデルはその男に網を投げかけたので、首尾よく水際まで手繰り寄せました。すると、初めは気がつかなかったのですが、その男は両手に、珊瑚のように赤い色をした二匹の魚を、片手に一匹ずつ持っているのです。そしてマグリブ人はいそいで驃馬のところに行き、例の二つのガラスの広口罎を取り、それぞれの罎に一匹ずつ入れて蓋をし、罎をまた旅籠のなかにしまいました。それが済むと、ジッデルのほうに戻って来て、彼を腕に抱いて、右の頬と左の頬に、熱烈に接吻しはじめました。そして言うのでした、「アッラーにかけて、あなたがいなかったら、私はもう生きてはいない。またこの二匹の魚もつかまえることができなかったら。」

こうして次第でございます。

ところでジッデルは、驚きのあまりもう身動きもしないでいましたが、

やっと最後に言いました、「アッラーにかけて、おおわが御主人巡礼様、もしもあなたが助かったこととその魚を捕えたことに、私が何かお役に立つたと、本気で思っていらっしゃるなら、どうかお礼の代りに、取りいそぎ、あの溺れ死んだふたりのマグリブ人について御承知のことと、くだんの二匹の魚と市場のユダヤ人シャマヤアについての真相を、伺わせて下さいまし。」するとそのマグリブ人は言いました。

「おおジッデル殿、実はあの溺死したふたりのマグリブ人は、私の兄弟なのです。ひとりはアブド・アル・サラームといい、今ひとりはアブド・アル・アハドといました。この私はアブド・アル・サマドといひます。また、あなたがユダヤ人と思っている男は、全然ユダヤ人などではなく、れつきとしたマールク派の回教徒です。その名はアブド・アル・ラヒームで、同じく私の兄弟です。ところで、やあ、ジッデル殿、われわれの父はアブド・アル・ワドッドといったが、これは大魔術師で、あらゆる神秘学の蘊奥を極め、われわれ四人の息子に、魔法と、妖術と、もともと深く隠された秘宝を、発見し開く術を、教えて下さった。されば、われわれは一心にこれらの学を修めることを励み、遂には魔神、魔霊、鬼神をば、わが命に従わせるに到るほどの学識の程度に達しました。父上が亡くなった時、われわれに非常な財産と莫大な富をお遺しになった。そこでわれわれは、遺された財宝とさまざまな護符と学問の書物をば、公平に四人の間で分配したが、しかしある写本類の所有については、われわれの意見が一致しなかった。それらの写本中も、とても重要なものは、『古人列伝』と題された一書で、これはまことに価いも値うちも測り知れぬもの、それだけの目方の宝玉をもつてしても、購うことのできない書物でした。事実そのなかには、地中に秘められたあらゆる宝に

(1) 前出、「もしアッラーの御心ならば」。疑念を現わす場合。

(2) 前出、マールク・イブン・アナス(七一五―七九五年)の創始したスンニ派の四学説の一つで、北西アフリカ、上エジプト、スーダン等に行なわれた。

ついでに正確な指示と、もろもろの謎と神秘的な記号についての解が記されているのであった。そしてあたかもこの写本のなかから、父上はその通暁する全知識を汲み取っていられたのでありました。

われわれの間によく不和が際立ちはじめたとき、われわれはひとりの尊ぶべき老翁がわが家にはいつてくるのを見た。まさに、父上を育てて、これに魔術と占術をお教へになったその人です。そして、この老翁は『深知のコーヘン』と呼ばれていたが、彼はわれわれに言いなすつた、『その書物を持ってきなさい』と。そこで『古人列伝』を持ってくると、彼はそれを手に取ってわれわれに申された、『おおわが子たちよ、お前たちはいずれもわが息子の息子たちで、わしはほかの子たちを退けて、ひとりだけに胤負をするわけにはゆかぬ。されば、お前たちのうちでこの書物をわが物にしたいと望む者は、アル・シャマルダルと呼ばれる秘宝を開き、そこから天球儀と臉墨の罫と剣と印璽を、わが許に持つてこなければならぬ。何となれば、これら四品はすべて、その秘宝のなかにはいつているのじゃ。それらの靈験たるや並々ならぬ。事実、その印璽は、名を口にするだに恐ろしき一魔神に護られておる。「轟く雷電の鬼神」という魔神じゃ。そしてこの印璽の所有者となる人間は、世の王者と帝王の権勢に、恐るることなく立ち向うことができ、欲するとき、縦横の地の支配者となることができる。剣といえ、これを所有する者は、ただこれを振うのみにて、意のままに、よく大軍を壊滅させることができる。というのは、剣を振えば直ちに、火焰と電光を発して、あらゆる戦士を滅ぼし尽くすのじゃ。また天球儀といえ、それを所有する者は、己が望みに応じて、いながらにして世界のあらゆる地点に旅し、東洋より西洋にわたるあらゆる国々を、訪れることができる。そのためには、自分の行きたいと思う地点と、経めぐらうと望む地域を、指で触りさえすればよい。するとその天球儀は廻り出して、くだんの国のあらゆる興味ある事物と共にその住民を、眼下に展開し、さながらそれらのものが己れの掌中にあるがごとしじゃ。そしてもし時おり、どこぞの国の土着人のもてなしが悪いとか、町々のうちのある町の歓迎ぶりが

面白くないというようなことがあつたら、その仇なす地域のある地点をば、太陽のほうに向けさえすれば、直ちにその地は火焰の餌食となり、全部の住民諸共に炎上してしまふのじゃ。さてまた臉墨の罫にいたつては、その罫にはいつている臉墨をもつて己が臉を擦る者は、即座に、地中に秘められたあらゆる宝が見えるのだ。以上のような次第じゃ。さりながら、この書物は、己れの企てに首尾よく成功した者の手にのみ、当然帰し、失敗せし者は、何らの要求をもなし得ぬであらう。お前たちはこの条件を承知するか。われわれは答へた、『一同承知致します、おわれらの父の長老よ。けれども、そのシャマルダルの秘宝とやらいうものについては、私どもは何ごとも存じませぬが。』するとわれわれに申された、『されば、わが子らよ、そのシャマルダルの秘宝というのは……』

——ここまで話したとき、シャハラザードは朝の光が射してくるのを見て、つつましく、口をつぐんだ。

けれども第四百七十夜になると

彼女は言った。

『……そのシャマルダルの秘宝というのは、「紅王」のふたりの王子の支配下にあるのじゃ。昔お前たちの御尊父は、この宝を奪おうと試みたものだ。しかしこの秘宝を開くには、それに先立つて、「紅王」の王子らを抑えねばならなかった。ところが、いよいよ御尊父がかまえてやうという瀬戸際に、ふたりは逃れて、赤い魚に変形して、カイロの近くのカーリン湖に飛び込んでしまった。その湖自体がまた魔法にかけられていたので、御尊父もいかにともなし得ず、その二匹の魚を捕えるに到りかねた。そこでわしに会いにきて、企ての首尾を訴えなすつた。わしは直ちに占星学上の計算をして、星占いをしてみた。するとそのシャ

マルダルの秘宝というのは、カイロの若者で、漁夫を業とするジッデル・ベン・オマールという名の男の仲介により、その男の顔を借りるのでなければ、開かれないことが判明した。そのジッデルという男には、カールン湖のほとりて遭うことができる。そしてこの湖の魔法は、そのジッデルという男による以外に解けぬのであって、その男が、湖底に下る天命の人間の両腕を縛した上で、これを水に投げ込まなければならぬ。投げ込まれた男は、「紅王」の魔法にかかったふたりの王子と格闘しなければならず、もしも彼の運勢が王子らに打ち勝つてこれを捕えるものであるならば、彼は溺れることなく、その手のほうが先に水上に浮かび上がるであろう。そしてジッデルが、彼をば網をもってすくい上げるであろう。しかし、命をおとす者は、両足から先に水上に上がって、そのまま打ち棄てられねばならぬのじゃ。』

この『深知のコーヘン』老翁の話聞いて、われわれは答えた、『いかにも、私どもはたとえ一命を賭しても、この大業を試みたいと存じます。』ひとりわれわれの兄弟アブド・アル・ラヒームだけは冒険を好まず、われわれに言った、『いや、私はしたくない。』それでわれわれは彼にユダヤの商人に身をやつてもらうことにして、われわれが万一の試みで落命した場合には、騾馬と旅囊を彼のところに送り届けさせて、漁師から買って取ってもらうことに申し合わせたのであった。

ところで、おおジッデル殿、起つたことの次第は既に御承知のとおりです。私のふたりの兄弟は、『紅王』の王子らの犠牲となつて、この湖で命をおとしました。そして私の番になると、私はあなたに湖中に投げ込まれた時、彼らと闘つてすんでのことにならうが、しかし心中呪文を唱えたお蔭で、うまくわが身のいましめを脱し、湖の破り得ない魔法を解き、『紅王』のふたりの王子を首尾よく捕えることができた。その王子とは即ち、いま御覧の、あの旅囊の纏のなかに閉じこめた珊瑚色の二匹の魚です。ところで、この魔法にかけられた二匹の魚、つまり『紅王』の王子は、実はふたりの有力な鬼神にほかならず、彼らを捕えたお蔭で、私は遂にいよいよシャマルダルの秘宝を開くことができ

るといふものです。

だがしかし、この秘宝を開くには、あなた自身が立会つて下さることが絶対に必要です。何せ『深知のコーヘン』の卜した星占いによれば、事はただあなたのお顔を借りてのみ成ることができると、予言されているのだから。

されば、おおジッデル殿、ひとつ私と一緒にマグリブの地の、ファースとミクナースから程遠からぬざる場所に来て、シャマルダルの秘宝を開くの力を貸してくれることを、承知してはもらえまいか。御要求は何なりと承知します。そしてあなたは永久に、アツラーにおけるわが兄弟となるでしょう。その旅を終えれば、あなたは悦び勇んで御家族の間にお戻りになるがよい。』

この言葉を聞くと、ジッデルは答えました、「おおわが殿巡礼様、私は自分の母親と兄たちをわが首に持つております。彼らを生きて行かせる世話は、私が見ているのでございます。もし私が御一緒に出かけるのを承諾すれば、彼らを養うパンはいったい誰が与えてくれるでしょうか。」マグリブ人は答えました、「あなたの行かない理由は無精にすぎない。もしも本当に、金子の不足で出発できない、母上が御心配というだけのことならば、あなたのお帰りで、四月に満たぬお留守中の母上の費用として、私は今すぐ金貨一千ディナールを差し上げて苦しゅうない。」一千ディナールと聞いて、ジッデルは叫びました、「では、おお巡礼様、その一千ディナールを頂戴して、私はそれを母に届けた上で、御一緒に出発すると致しましょう。」するとマグリブ人はすぐにその一千ディナールを渡したので、ジッデルはそれを母に渡しに行つて、言いました、「お母さんと兄さんたちの費用に、この一千ディナールをお納

(1) Al-Schamardal. 「丈高き者」の意。(ハートン)。

(2) ベインはこれに「魔神の王たちの首長の一人」と註する。

(3) ベインはこれを二つの町としているが、ハートンはこれは一つの町を指すと註している。

お下さい。それというのは、私はこれからあるマグリブ人と一緒に、マグリブまで四カ月ばかりの旅に出かけます。そして、おお母さん、私の留守中、どうか私のためにせいでい祈って下さいませ。そうすれば、私はお母さんの私への祝福によって、恩恵に満たされるでありますよ。」母親は答えました、「おおわが子よ、お前がいなくてはどんなにか私は淋しくてたまらないことだろう。それにお前の身が案じられてなりません。」彼は言いました、「おお私のお母さん、およそアツラーの御加護の下にある人は、何も恐れることはありません。それにそのマグリブ人というのはとても立派な人です。」そしてしきりにそのマグリブ人のことを誉めました。すると母親は言いました、「どうかアツラーがその財産家のマグリブ人の心を、お前のほうに傾けて下さるように。では、息子よ、その人と一緒にお出かけなさい。多分その人はお前によくしてくれるでしょう。」そこでジッデルは母親に別れを告げて、マグリブ人に会いに立ち去りました。

彼が来たのを見ると、マグリブ人は誤ねました、「母上に御相談なすつたかな。」彼は答えました、「いかにも致しました。母は私のために祈って、私を祝福してくれました。」その男は言いました、「では私の後ろに乗りなさい。」ジッデルはマグリブ人の後ろに、牝驃馬の背に乗り、こうして、正午から午後の半ばまで旅をしました。

ところで、旅はジッデルに非常な食欲を催させて、無上にお腹が空いてまいりました。

——ここまで話したとき、シャハラザードは朝の光が射してくるのを見て、つつましく、口をつぐんだ。

けれども第四百七十一夜になると

彼女は言った。

ところが、旅囊のなかに何ひとつ食糧が見当たらないので、そこで彼はマグリブ人に言いました、「おおわが殿巡礼様、どうやらあなたは旅行中食べる食糧をお持ちになるのを、忘れなすつたようですね。」その男は答えました、「もしやお腹が空いたのかな。」彼は答えました、「ええ、ワッラーヒ。」するとマグリブ人は驃馬を停めて、ジッデルとともに地に下りて、これに言いました、「ここにあの袋を持ってきて下さい。」そしてジッデルがその袋を持つてくると、訊ねました、「あなたの魂は何をお望みなか、おおわが兄弟よ。」彼は答えました、「何でも結構です。」マグリブ人は言いました、「御身の上なるアツラーにかけて、食べたいと思うものを持って下さい。」彼は答えました、「パンとチーズをいただきたいです。」その男は微笑して言いました、「おおお気の毒な人よ、パンとチーズですか。これは何ともあなたの御身分にあまりふさわしくない。何か特に結構なものを所望していただきたい。」ジッデルは答えました、「今ならば、私は何でも結構と思うことでしょう。」マグリブ人は聞きました、「焼いた雛鳥はお好きかな。」彼は言いました、「やあ、アツラー、好きです。」更に聞きました、「蜜をかけた米はお好きかな。」彼は言いました、「大好きです。」相手の男は更に聞きます、「挽肉を詰めた茄子はお好きか、トマト煮の小鳥の頭は、パセリでまぶした菊芋と蓮芋は、天火で焼いた羊の頭は、搗いて、膨らせて、調理した大麦は、挽肉を詰めた葡萄の葉は、捏粉菓子、またこれこれしかじかの物は？」こうしてその男は二十四種の料理の名を挙げるのでしたが、その間ジッデルは考えました、「この男は気違いなのかしらん。だってこうしていろいろの料理の名を挙げるけれど、ここには料理場もなければ料理人もいないのに、いったいどこから持つてくる気だろう。もうたくさんだと言つてやるとしよう。」そして彼はマグリブ人に言いました、「もうたくさんです。こんないろいろな料理を、ひとつも眼の前に見せもせず、いったいいつまで私に食べたい気ばかり起させなさるのですか。」けれどもマグリブ人は答えました、「御身の上に歓迎あれ、おおジッデル殿。」そしてその男は袋のなかに手をつ突つ込んで、焼き立ての雛鳥二羽